

日本
ハンザキ研究所 ニュース 2007(3);通巻14号

発行 2007. 03. 31

〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL/FAX (079)679-2939

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

ナショナル・ジェオグラフィック社TV

ナショナル・ジェオグラフィック日本語版の雑誌は、多くの方に知られていると思うがテレビが日本でも250万世帯で受信されているという。水族館の現役時代に一度取材の下見に応じたことがあった。その時には国外での放映のみだと思っていた。日本の天然記念物シリーズの企画という話で、やって来たのは米国のキャサリン・クーリルさんと通訳兼運転手の英国人マーク・ブラジルさんであった。マークは日本語がペラペラで朝日新聞社の月刊誌に動物記を連載していたので、自分で書いているのかと聞くと答えはノーと言うことであった。ツルツル頭の快活な35歳の鳥類学者は、夜の調査行の後で、こんなにシンドイ研究をなんで続けているのかと質問してきた。調査の後で旨いビールを飲むためだと答えるとナイス・ジョークだとばかり大笑いになった。おまけに、英国ではビール一本までは飲んで車を運転してもいいことになっていると言いだして、クーリルさんを苦笑させていた。結局、本番の取材は無かったが、取材中に首切れ出血個体を見たのはショックだったようだ。それでもイモリを見せた時にオー！ビューティフルと叫び、オオサンショウウオの発した臭いにストロング・スメル！と言われたのが印象に残った。

今回は、バー教授主演の動物番組というところで、クロコダイルの専門家が世界各地の動物をサーチして見せる従来型のものだった。普段は物静かなバーさんは、カメラが回り始めると人格が一変するごとく猛烈にハイな演技者に変身するには閉口した。日中は小雨で、夜になると雪景色になり背景は絶好のものになったと思うが、最初に採捕したのは全長55cmの小振りな個体であったが、取り合えず出演してもらうことにした。その間に助手を務めてくれたキタイ設計の柿木俊輔さんに、より大型個体の発見を頼んだ。しばらくして80cmの大型個体をゲットしてくれたので、バーさんは更にフィーバーした。一体どのような番組になっていくのかは分からないが、とにかく多くの方々にオオサンショウウオの現状を知っていただけたと考えている。ビデオ・テープを送ってもらったら内容の紹介をしたいと思っていますが、バーさんは又オオサンショウウオを見に来たいと上機嫌であった。ドクターとプロフェッサーの称号を持つユニークなタレントさんという印象を受けました。(Dr. Brady Barr, 1964年テキサス生まれ)

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて(4) — ハンザキ、ハンザケ
NPO 法人 地域再生研究センター会員
日本ハンザキ研究所 研究員 池上 優一

今回は、ハンザキなどについて触れます。江戸時代の後半に、小野蘭山(1802)「重修本草綱目啓蒙(本草綱目啓蒙)」で、鯢魚(サンセウウオ)の地方名、ハンザケ^{石州} ハンザキ^{作州} ハダカス^{丹波} アンゴウ^{同上}などが紹介されたことは述べましたが、江戸初期刊行の「宜禁(ぎきん)本草集要歌」には、ハンザケ題の三歌が記載されており、当時、魚類としてのハンザケ名が既に用いられていたことを伺わせる資料として注目されます。

ところで「重修本草綱目啓蒙(本草綱目啓蒙)」には、ハンザキの謂れとして、「・・性最強シ俗ニ傳フ噎ヲ治スト、半身ヲ切り取りテ用ヒ、ソノ餘水中ニ放ツ時ハ、自ラ肉ヲ生ジテ腹全身トナル故ニハンザキノ俗稱アリ、・・」、つまり、「オオサンショウウオを裂いて、半分を噎(喉のつかえや咽びなど)の薬に用い、半分を再度池に戻しておく、体が元通りになっているので、ハンザキという名もあるのだ。」と説明しています。

他には、昭和5年に岡山県編纂の「岡山県下二産スル特殊動物竝ニ該動物ニ関スル研究論文目録」の中で「はんざきノ語源ニ関シテハ寛政11年(1799年)ニ刊行セラレシ木邨孔恭著、山海名産図会巻ニ、『性至テ強キ物にて常に小池に畜ひ用ゆべき時其の半身を裁断、其の半を復小池へ放ち置けば自ら肉を生じ元の全身となる故に作州の方言にハンザキという』トアリ、本動物ハ、其喪失シタル体部ノ再生力盛ナルニ因リテ、斯ル解説ヲ生ジタルモノナルベシ」と引用解説しています。

上記内容は、少し非現実的と思われる。日本ハンザキ研究所の栃本所長は、標準和名に「ハンザキ」を推していますが、「『半分に裂いても・・・』では、まず生きられないので、口が体の巾いっぱい開き、まるで半分に裂けているように見えるのが語源となっているのではないか」と指摘していますし、同意見の方も多いようです。また、他説では、「ハジカミ」から派生して「ハンザキ」などの呼び名が生まれたというものもあります。

小野蘭山は、おそらく地方を巡る過程で、岡山県北部(作州)や島根県西部(石州)でハンザキとかハンザケという地方名を使っていることを直接かあるいは間接に耳にしたものと思われる。彼が、訪れた場所やルートは大変興味あります。

このシリーズでよく引用している、生駒義博編の「日本ハンザキ集覧」は津山科学教育博物館で編集発行されており、まさに作州の中心部岡山県津山市にあり、編纂にあたってオオサンショウウオのことを頻りにハンザキと紹介していることは、「ハンザキ地方名」のメッカであったことが影響していると思われる。

この「ハンザキ」という言い方については、栃本所長は、「オオサンショウウオの研究Ⅹ-用語について(1)-」(兵庫生物 第11巻 第2号—H. 8. 3)で、「和名 オオサンショウウオ」の項を設け、日本の標準的な動物図鑑の前身である「日本動物図鑑」(北隆館 1927)には、オオサンショウウオのことを「はんざき はんざき(鯢魚)科」として、カナ交じりの漢字で解説していることをあげ、その他の動物辞典や広辞苑での名称の取上げ方の変遷についてまとめています。そして、生駒編の「日本ハンザキ集覧」に収録されている文献は、明治時代は「ハンザキ」が主流であり、昭和になって「オオサンシ

ョウウオ」が増えてくることを述べ、さらに、大野正男(1991)「日本産主要動物の種別文献目録(23)オオサンショウウオ(1)」に収録された570文献中のタイトルに「ハンザキ」と出てくるものは61編(1903~1989年)で、「オオサンショウウオ」は266編(1900年以降)であり、特に昭和27年に特別天然記念物に指定されてから、「オオサンショウウオ」という呼び方が全国的に流布されるようになったのであり、文化財保護法の影響が大きいと指摘しています。それに、オオサンショウウオは大サンショウウオつまり、サンショウウオの大型のものを言っていることもあると指摘しています。

ここで、生駒編の「日本ハンザキ集覧」の中の〈古典(学術書)の部〉で、日本の研究者がオオサンショウウオをどのように呼んでいたかを確認してみたいと思います。

明治28年(1895年)にヨーロッパの化石を紹介した横山又次郎の「化石學教科書-中巻」の中で、オオサンショウウオに関して、「本類ハ鯢魚(サンセウウオ)・・・と」書き出しています。そして、オオサンショウウオ研究の第一人者の東京帝国大学教授、石川千代松が岡山県真庭郡湯原町(ハンザキ大明神やハンザキセンターあるいはハンザキ祭りなどで有名な岡山県の三大温泉地の一つで、現在は真庭市湯原町)に東京から出かけて33年間に亘り調査・研究に専念し、明治36年に著した「ハンザキ調査報告書」があります。氏はハンザキ方言のメッカで調査・研究を続けたためか、オオサンショウウオをハンザキ(鯢魚)と言い切っています。そして、その報告書の中で、「・・・はんざきは、本邦ニテハ其産出スル所ノ土地ニヨリ種々異リタル名称ヲ有スルモノニシテ之レヲさんせうゝを(山椒魚)ト称スルは・・・。又、本邦ノさんせうゝをト云フ語ハ唯はんざキノミヲ云フモノニ非スシテ此ノ類ノ動物ヲ一体ニ云フモノ、・・・又大さんせうゝをハ伊賀、伊勢ニテハ之レヲはぜこい又はぜくいト云ヒ丹波、丹後ニテハはだかすト又ハあんこと云ヒ美作、備中、備後、伯耆、出雲ニテハはんざき又ハはんざけト云ヒ稀ニあんこと云フ。・・・」と述べ、続いてハゼクイ、アンコ、ハンザキの解説をしており、ハンザキについては「其補缺力ノ大ナルニ因リシモノニシテ、コレヲ半分ニ裂クモ猶生活スト云フニ因ルモノナリト云ヘリ故ニ此ノ名称ハ幾分カ学術上ノ事実ニ依ルノミナラス又前述ノ如ク広ク用ヒラルゝヲ以テ余ハ此ノ動物ヲはんざきト呼フヲ好都合ナリト信ス。・・・」と標準的に用いるかのごとき表現をしています。

前出の「岡山県下ニ産スル特殊動物並ニ該動物ニ関スル研究論文目録」の目次に「はんざき或ハ大山椒魚」と書き出しています。田子勝弥(1931)「鱒鯢と山椒魚」には、各論の見出しに「大山椒魚一名鯢魚」で続いて学名を紹介しています。さらに、佐藤井岐雄(1943)「日本参有尾類総説」では、項目見出しに「オホサンセウウヲ(ハンザキ)」と書いています。

最後に、オオサンショウウオ多産地である兵庫県多紀郡篠山町(方言として「あんこう」とか「はだかす」が残っている現在の篠山市)で昭和11年に発行された篠山尋常高等小学校編纂「郷土辞典」(同郷土教育研究会発行)の中で、地域の動植物を紹介しており、爬虫類・両生類としてヘビやカエルの類に続いて、「いもり、箱根さんしやうを、はんざき(さんしやうを)」と出ています。これは、当時、ハンザキという呼び名が広く用いられていたことを示す資料の一つと思われます。(続く)

愛知県瀬戸市の庄内川水系蛇ヶ洞川

オオサンショウウオ棲息調査 II

蛇ヶ洞川の第二回の調査が3月24日～27日にかけて実施された。生憎の強風雨で24日の夜は調査を見送るしかなかった。キタイ設計の柿木俊輔さん、大阪府立大学院生の田口勇輝さん（4月からは京都大学院生）に加えて、今回はウエスコの新星・東口信行さんと若手のオオサンショウウオ三羽ガラスと私が目しているメンバーで3班に分かれての調査になる予定であった。東口さんは生憎なことに、年度末の受託業務の報告で参加できなかったが、代役のウエスコ・オオサンショウウオ軍団のスタッフが健闘し、実力を示してくれたのは、調査委員として推薦した私にとっては満足のいく結果であり、いかに経験の積み重ねが重要であるかを見せてくれたものと思う。

二夜目は、まだ水量も多く濁りの引かない河川状況であったが夜間調査が実施された。私は3月22日に右手親指に打撲傷と言う状態（ハン研ニュース№12参照）での参加でありこの親指の働きと言うものを痛切に実感させられた。それは、調査開始の入川直後に土手で片足を滑らせた時に右手で握っていた手綱の柄に力が入らず、体を支える事が出来なくて川の中へ転げ落ちたことだった。その右腕でショックを受け止めたが、大きな青痣とタンコブを作る結果となった。調査結果は6個体すべて再捕で、昨年の第一回3夜分に相当するものであった。三夜目は水量も減り透明度も良くなったので、上流区域にも調査班が入り、新規個体2を登録した。この水域では初めての確認になるが、大きな岩が多く水量が少ないと隠れ家から出なくとも餌動物を捕食できるのではないかと思った。今回は水が多かったという状況で姿を見せてくれたのではないだろうか？

日中の幼生調査でも、大きな成果を上げることが出来た。人工巣穴№3は、昨秋に産卵が確認されていた巣であるが、親は居なかったものの約160匹の真っ黒な子供を数え、周辺の河川の草むらなどからも14個体を確認できた。また、標高90m程の下流域でも5個体が発見できたが、巣穴らしき場所の特定はできなかった。しかし、この周辺では何年か前に数十匹の幼生集団が確認されているので、このように標高の低い場所でも繁殖していることが確かめられた。

昨年は石原産業のフェロシルト（埋め戻し材）事件が再々報道されたが、東京大学の演習林沿いの現場からは搬出が終了し広い凹地ができていた。しかし、川のあちこちにはまだ赤い砂粒状の堆積物が見られ、完全に河川環境が復旧するには時間がかかりそうだ。そして、道路から不法投棄された大量の大型ゴミを取り除くのは並大抵のことではないだろうと思う。当河川におけるオオサンショウウオの生息調査は文化庁の補助事業として2か年に渡って実施されるが、自然環境が再生され本種の繁殖東限に近い蛇ヶ洞川水系に多くのオオサンショウウオが生息するようになるまで、地域の皆さんが見守って頂きたいと思います。ガンバレ！「瀬戸のサンショウウオを愛する会」の皆さん！



写真2 人工巣穴の幼生確認調査 蛇ヶ洞川



写真1 雪の降る河原でオオサンショウウオとDr. barr



写真3 校庭に掘られたビオトープ湿地



写真4 観察施設のガラス窓と雨戸



写真5 津山城址の玄関口にある津山科学教育博物館



写真6 ハンザキイメージのグッズ

ハンザキ研日誌 2007年3月

- 1日：アマゴ解禁となり、釣り人が次々と
：兵庫県高齢者大学・いなみの学園にて講演
- 2日：オオサンショウウオ調査(GS-232)～6日
- 3日：黒川地域活性化協議会、公民館にて13名
：老朽化した遊具・バックネット・水タンクなど撤去
- 6日：市川（竹原野地区）オオサンショウウオ幼生調査
：校庭に湿地ビオトープの穴掘り
- 7日：河川環境観察施設の工事検査と朝来市への贈呈（リバーフロント整備センター）
- 9日：AM：宍粟市にて揖保川水系流域委員会
：PM：姫路市にて市川流域委員会
- 10日：オオサンショウウオ調査(GS-233)～13日
- 11日：朝来市山東町からヒキガエルの産卵場で死体13（生体1）の連絡、京大松井研へ
- 12日：積雪10㍉、今冬3回目（12月・1月と）
- 14日：大阪府安威川ダム会議
- 15日：円山川水系自然再生委員会、豊岡市にて
- 19日：ナショナル・ジェオグラフィックTV取材（豊岡市と朝来市）Dr. Barr他
- 20日：オオサンショウウオ調査(GS-234)～23日
- 21日：朝日新聞A1A1取材
- 22日：観察施設の巣穴の雨戸細工
- 23日：観察施設記者発表
- 24日：愛知県瀬戸市蛇ヶ洞川オオサンショウウオ調査II～27日
- 30日：オオサンショウウオ調査(GS-235)～4月26日（ハン研滞在28日の新記録）
（今月は4回16日間の出勤？で、総計64人の利用がありました）
-

ハンザキ所長のツブヤ記録

今までのハンザキ研における最長滞在期間は15日間であった。食料を持参してもせいぜい7日くらいしか食いつなげることが出来ない。周辺にはコンビニは無論、スーパーも飲食店や食料品店も無くひたすら持参した食料で凌がねばならない。3月末からのハンザキ研へは4月にほとんど予定が入っていなかったの、記録更新を目指して籠城するつもりで臨んだ。今年度からの、地域住民の足として「あこバス」という前日までに予約すると運行する市民サービス・バスが開始されたが、これは大変都合のいいタイムスケジュールで、2時間ほどでスーパーマーケットから買い出しをして帰れるので大助かりだ。